

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：35413

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19752

研究課題名（和文）認知症高齢者に特化した就業継続支援モデルの開発に関する研究

研究課題名（英文）Development of a continued employment support model for elderly people with dementia: A qualitative study

研究代表者

乗越 健輔（Norikoshi, Kensuke）

広島国際大学・看護学部・講師

研究者番号：40638722

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：認知症高齢者における就業継続支援のあり方を検討するために、認知症高齢者を対象にインタビュー調査を実施し、就業体験に係る認識を質的に分析した。

その結果、【人間関係の棘】【健康不安と就業の狭間】【肯定のまなざしの中】【助けられていることの実感】【培ってきた力を発揮したい】【自律的に取り組む】【意識的な自分磨き】【社会的役割に喜び】【社会経済活動の拡がり】【非金銭的価値の味】の10グループに統合された。

認知症高齢者は、職場においてネガティブな経験を有しながらも、他者の肯定的なまなざしやサポートに感謝しながら、自律的・前向きな意識を持って就業し、就業を継続することに意味と価値を見出していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、認知症高齢者の就業体験の認識を構造化し、就業継続支援のあり方を検討した。

認知症高齢者の就業継続を可能にするために、職場内外にわたる幅広い人間関係形成が求められ、そこには認知症高齢者とかかわりを持つ他者の肯定的・愛護的な姿勢や互恵性が育まれるような人的な環境調整が必要である。また、職場において、認知症高齢者の認知機能や希望に合わせたテラーメイド型の柔軟なプログラムや身体的な健康管理、メンタルヘルス支援の重要性も示唆された。

今後、これらを含む就業継続プログラムを基盤とした就業の場を創設し、本プログラムの実施がそこで働く認知症高齢者の認知機能や日常生活機能に与える影響を検証する。

研究成果の概要（英文）：I conducted semistructured interviews with seven people with dementia and qualitatively analyzed their perceptions of their work experiences to consider support for elderly people with dementia to continue working.

Based on the results, the employment experiences of elderly people with dementia were organized into 10 groups: thorns in human relationships; balancing health concerns with employment; being wrapped in the gaze of affirmation; feeling of being helped; desire to use their accumulated experience; autonomous working; conscious self-improvement; happiness from gaining social roles; expansion of socioeconomic activities; and taste of nonmonetary value.

Although the elderly people with dementia had negative experiences at work, they were grateful for the positive views and support from others. Additionally, they worked autonomously with a positive mindset and discovered meaning and value in continuing to work.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症 高齢者 就業継続 モデル 質的研究

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本邦において、生産年齢人口の減少・認知症高齢者（認知症を有する65歳以上の高齢者）数の増加といった社会構造の変化を見据え、年齢や障害の有無に関係なく働ける環境を整備することは喫緊の課題である。

認知症を有する人の就業と健康維持等の関連を分析した研究によると、認知症を有する人の積極的な就業が認知機能維持に好影響を与えることから（Chaplin & Davidson, 2016）、認知症を有する人においても、可能な限り就業継続等の社会参加を維持することが望ましい。一方で、認知症を有する人の就業継続に関する経験を質的に分析した研究によると（Then et al., 2014）、職場でのサポートが不十分で悲惨な経験をした人もおり、職場を始めた認知症を有する人に対する理解の促進が不可欠である。しかし、認知症を有する人の就業に関する研究の多くは、若年性認知症（64歳以下の方が発症する認知症）を有する人を対象とした研究で、認知症高齢者を対象とした研究は見当たらない。

平成29年版高齢社会白書によると（内閣府, 2017）、本邦における認知症高齢者の数は462万人で、高齢化の進展に伴い、その数は増加することが予想される。職場における認知症高齢者の戦力化や就業継続の可能性拡大のために、認知症高齢者の就業体験に係る認識を構造化し、就業継続支援のあり方を検討することは重要と考えられる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知症高齢者の就業体験に係る認識を構造化し、認知症高齢者に対する就業継続支援に関して示唆を得ることである。

3. 研究の方法

(1) 対象者

就業により金銭的報酬を得ている認知症高齢者7名（軽度認知障害を有する高齢者1名を含む）を対象とした。

(2) 調査方法・内容

インタビューガイドに基づき、就業体験に係る認識について半構造化面接調査を実施した（データ収集期間：2022年4月～2023年7月）。面接内容は対象者の許可を得てボイスレコーダーに録音し、逐語記録を作成した。

(3) 分析方法

本研究では、KJ法（フィールドワークなどから得た質的データを集め、それら混沌としたデータを統合し、新たな発想を生み出すのに適した手法）を用いて認知症高齢者が語った就業体験に係る認識を構造化した。

まず、KJ法の専門家による研修を受けた研究者一人がKJ法の基本技法に従い（川喜田, 1986）、対象者が語った内容を適切に単位化・圧縮化してラベル化した後、それらに対して「多段ピックアップ（個々のデータの価値を積極的に生かして最善の結果を得るために、多

量のラベルを精選するための方法)」を行い、ラベルを精選した。

次に、多段ピックアップによって精選されたラベルをもとに、「狭義の KJ 法」をグループ編成、図解化、叙述化の手順で行った。なお、KJ 法は分析を行う研究者の経験や技術面が結果に反映しやすいため、分析過程において KJ 法の専門家にスーパーバイズをうけた。

(4) 倫理的配慮

本研究は、広島国際大学医療研究倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:倫 20-003)。調査に先立ち、調査研究対象者、またはその代諾者に対して口頭と文書で本研究の趣旨を説明した。具体的には、「研究の目的及び意義」「研究対象者に生じる負担並びに予測されるリスク及び利益」「匿名性を遵守すること」「研究参加に同意した場合も随時これを撤回できること」などを説明し、その上で研究参加の同意を得た。

4. 研究成果

(1) 認知症高齢者の就業体験に係る認識 (図 1)

対象者へのインタビューから得られた「就業体験に係る認識」に関係がありそうな内容を、適切に単位化・圧縮化してラベル化した。その結果、94 枚のラベルが得られた。それらに対して「多段ピックアップ」を行い、40 枚のラベルを精選した。次に、それら 40 枚を元ラベルとして「狭義の KJ 法」を行った結果、【人間関係の棘】【健康不安と就業の狭間】【肯定のまなざしの中】【助けられていることの実感】【培ってきた力を発揮したい】【自律的に取り組む】【意識的な自分磨き】【社会的役割を得られる喜び】【社会経済活動の広がり】【非金銭的価値の味】という 10 のグループに統合された。

まず、ネガティブな認識として人間関係や自身の健康についての不安が存在した。職場における他者とのかかわりの中で、自身への悪口が耳に入るなどつらい経験をする場合があった(【人間関係の棘】)。また、加齢に伴う健康不安や認知症悪化の予期不安を抱え、これらと就業継続願望の狭間に立っていた(【健康不安と就業の狭間】)。

そういった不安定性を有するものの、一方で肯定的・愛護的に認知症高齢者を見つめる支援者や他の認知症高齢者が存在し、本質的に肯定的な理解や温もりを向ける【肯定のまなざしの中】にいるとの認識も浮上した。加えて、他の認知症高齢者や支援者によるサポートを受けることで【助けられていることの実感】を得ており、職務遂行能力の高低にかかわらず、“仕事ができる”という肯定的な感触を得ていた。このような肯定的な感触の影響により、認知症高齢者は【培ってきた力を発揮したい】という希望を持ち、責任感や主体性を持って仕事に臨んでいた(【自律的に取り組む】)。そして、【意識的な自分磨き】を念頭に置き、自身の力で完遂できるよう試行錯誤しながら仕事に取り組んでいた。

これらの前向きな意識による就業の結果、他者に必要とされ、社会の要請に応えられることが生きる支えとなっており(【社会的役割に喜び】)、就業で得た金銭的報酬により、豊かな社会性や幅広く活動できる場を獲得し、【社会経済活動の広がり】を知覚していた。加えて、職場外にまで及ぶ幅広い人間関係形成や認知機能への好影響に非金銭的な価値を感じていた(【非金銭的価値の味】)。

① ②
 ① ②
 ① ②

本質的に肯定的な理解や温もりを持つ、他者のまなざしの中で仕事をしたい。

肯定のまなざしの中

①
 ②

助けられていることの実感

① ②

自立的に取り組む

① ②

人間関係の棘

① ②

非金銭的価値の味

① ②

培ってきた力を発揮したい

① ②

自分的磨き

① ②

社会的役割に喜び

① ②

社会経済活動の拡がり

① ②

健康不安と就業の狭間

① ②

① ②

① ②

図 1. 認知症高齢者の就業体験に係る認識

(2) 認知症高齢者に対する就業継続支援のあり方

認知症高齢者が就業体験をどのように認識しているのか、KJ法によってその語りを構造化した結果、10のグループに統合された。認知症高齢者は、職場においてネガティブな経験を有しながらも、他者の肯定的なまなざしやサポートに感謝しながら、自律的・前向きな意識を持って就業し、就業を継続することに意味と価値を見出していた。

認知症高齢者の就業継続を可能にするために、就業を通じて得られる幅広い社会経済活動や非金銭的報酬を見据えると、職場内における良好な人間関係の構築にとどまらず、職場外における人間関係形成も含んだプログラムを検討する必要がある。

一方で、認知症高齢者は人間関係においてネガティブな経験を持っていることがあり、それが自律的で前向きな意識を持った社会参加を阻害する可能性がある。職場において認知症高齢者とかかわりを持つ他者の肯定的・愛護的な姿勢や互惠性が育まれるような人的な環境調整が必要と考えられる。また、認知症高齢者が自身の持てる力を発揮し、自律的で前向きに仕事を遂行できるよう、個人の認知機能や希望に合わせた、テーラーメイド型の柔軟なプログラムも求められる。

加えて、就業継続の願望と加齢に伴う健康不安や認知症悪化の予期不安の狭間に認知症高齢者は立たされており、職場において身体的な健康管理やメンタルヘルス支援の重要性が示唆された。

<引用文献>

- Chaplin, R., & Davidson, I. (2016). What are the experiences of people with dementia in employment?. *Dementia*, 15(2), 147–161. <https://doi.org/10.1177/1471301213519252>
- 川喜田二郎 (1986). *KJ法—渾沌をして語らしめる*. 中央公論新社, 東京.
- 内閣府 (2017). 平成 29 年版高齢社会白書. https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/zenbun/s1_2_3.html
- Then, F. S., Luck, T., Lippa, M., Thinschmidt, M., Deckert, S., Nieuwenhuijsen, K., Seidler, A., & Riedel-Heller, S. G. (2014). Systematic review of the effect of the psychosocial working environment on cognition and dementia. *Occupational and environmental medicine*, 71(5), 358–365. <https://doi.org/10.1136/oemed-2013-101760>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 乗越健輔、田淵啓二、小林敏生
2. 発表標題 認知症高齢者の就業継続支援に関する質的研究
3. 学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------